
シンポジウム

論題 中世における〈ことば〉

司会 筑波大学 野町 啓

提題：オリゲネスとアウグスティヌス
における声

立教大学 加藤 武

提題：『三植一体論』におけることば論
大阪教育大学 中川純男

(於 東京都立大学 1988. 11. 20)

司会

野町 啓

本37回より始まった新しいシンポジウムのテーマが、中世哲学における「記号」もしくは「言語」ではなく、ほかならぬ「ことば」であり、それとアウグスティヌスとのかかわりが取り上げられたことにまず注目したい。本シンポジウムの意義は、まさにこのテーマそのものに求められるように思われるからである。そしてここで念頭に浮かんでくるのは、H. G. Gadamer の *Wahrheit und Methode* (1960) の第Ⅲ部、2. 《Prägung des Begriffs 'Sprache' durch die Denkgeschichte des Abendlandes》に展開されているプラトン以降の西洋の言語観の変遷であり、とりわけそこにみられるアウグスティヌス、ひいては中世の言語観に対する評価であろう。Gadamer は、ギリシア的 *λόγος* の中世における *ratio* と *verbum* への分極化によって言語現象のより詳細な考察が可能となったと見なし、そこに進歩を認め、特に受肉とそれとのかかわりにおけるアウグスティヌスの *verbum cordis* の観点を重視している。つまり彼によれば、*Sprache* と *Sache* とは、プラトン以降、*Sprache* が *Wort* の植相でとらえられ、*Zeichen* と化することにより分裂するが、アウグスティヌスの *Sprache* をめぐる思索により両者は本来あるべき統一を獲得することになる。

では、Gadamer の指摘はともかく、*λόγος* が *verbum* と *ratio* とに分極したことは、どのような意味を持つのであろうか。われわれは、アウグスティヌスにとどまらず、

広く中世における「ことば」観を問題にする場合、いわゆる大文字の *Verbum* と小文字の *verbum* を区別して考えざるをえない。しかもアウグスティヌスに即していえば、後者は前者の *similitudo* とみなされ、さらに *imago Dei* としてのわれわれの精神のうちその *similitudo* たる所以が探究されていく。つまり「ことば」の問題は、一面において *fides* と深くかかわっており、超越的次元からの照射を必要とする。しかも *Sache* や *Zeichen* といっても、アウグスティヌスにおいては、三合一体が *una quaedam summa res* (*De doct. christ.* I, 5, 5) であり、聖書もまた神によって与えられた *signum* (*ibid.*, II, 2, 3) とされているのである。だが、こうした観点があるがゆえに、先の *Verbum*, *verbum*, *imago Dei* の関連が示すように、「ことば」は、われわれの *animus* なり *mens* を離れては考えられず、今回の提題にみられたように *cogitatio* 自体を *verbum* と呼びうる局面が展開されることにもなってくる。*lógos* が *ratio* と *verbum* に二極化すること、*Verbum* と *verbum* とを分けて考えざるをえないこととは別個の問題ではなく相即しているのであって、*ratio* と *verbum* の分極といってもそこにはあくまでも両者の対応なり究極の関連が含意されているとみななければならない。それゆえ、「ことば」を、単に *le signifiant* と *le signifié* との二項関係において *Zeichen* としてのみとらえるのではなく、そこに *animus* なり *mens* を介した三項関係においてみようとすると、いわば「ことば」の内在的理解の局面も開かれ、重要性を持つことになるのである。R. Markus は、アウグスティヌスにおいても *signum* と *verbum* とは区別され、われわれの心とかかわる「内なることば」は、*signum* とは決して呼ばれていないことを指摘している (cf., "St. Augustine on Signs", *Phronesis*, 2, 1957, pp. 60-83, esp. p. 77)。また先の Gadamer も *das sprachliche Wort* は *Zeichen* ではないと主張しているが (S. 394)、これは、「ことば」がわれわれの精神の働きと深くかかわり、むしろ精神の働きそのものでもあることを示唆しているといえよう。

アウグスティヌスが、中世における超越と内在とが微妙に交差するこうした「ことば」論の端緒に位置し、独自の観点を提示したことには、異論はないであろう。そして、今回、中川・加藤両氏という最適の発表者を得て、アウグスティヌスのテキストが見事に開かれ、それと共に中世なりアウグスティヌスの枠を越え、「ことば」をめぐる根元的諸相が論及されたことはきわめて意義深い。中川氏が、通常みられるストアの言語観とではなく、アウグスティヌスとアリストテレスとの比較という大胆な試

みにより、「ことば」を心とのかかわりにおいてみようとする両者の見解の類似にもかかわらず、ものと心、さらにそれらと「ことば」とのかかわり方に双方の根本的相違のあることが窺われたことは注目に値する。この場合、アウグスティヌスにおける *res-scientia-cogitatio-verbum* (*scriptum, prolativum*)、アリストテレスにおける *πράγματα-αἰσθησις-νόημα-τὰ γραφόμενα* (*τὰ ἐν τῇ φωνῇ*) の比較分析を通して、*scientia* の時間性、さらにそれと *voluntas* とのかかわりの指摘は、内在的側面からアウグスティヌスの *verbum* がとらえられつつも、そこに超越的側面があり、*Verbum* と *verbum* との垂直関係が示唆されていたように考えられる。アリストテレスの言語観は、「ことば」を *πράγματα* ひいてはその構成要素との水平関係におくにとどまり、三項関係が一見とられてはおりながらも、「ことば」とものとの関係が二項関係へと転化し記号化して、*das sprachliche Wort* ではなく *das Wort* となる要因が多分にあるように思われるのである。加藤氏の提題は、中川氏のいわば内在的・水平的「ことば」の問題を、超越的・垂直的側面とどうかかわるかに重点をおきつつ展開し、両氏の論点は連続したように考えられる。氏は、『ヨハネ福音書』(1:23) をめぐるオリゲネスとアウグスティヌスの比較という、これもまたあまり例のない問題設定の下に、アウグスティヌスの *vox* の持つ意義を明らかにするという興味深い試みを行った。そしてアウグスティヌスにおける *vox* が内なる言葉の現象化であると共に、*Verbum* と *verbum*、超越と内在とを微妙に連続させ、永遠と時間とを結ぶ架橋の意味を有することを解明されたが、これも本シンポジウムの重要な成果の一つであろう。また説教者としてのアウグスティヌス像を前面に出すことにより、*vox-verbum* の問題がコミュニケーションの回路の問題と交差し、そこに *persona* の問題も絡まることの指摘も記憶に残るところである。

今回のシンポジウムにおいては、二人の提題者が、はからずも共通して、それぞれアリストテレス、オリゲネスというギリシアの哲学者、教父との比較を軸に問題を展開したが、こうした問題設定自体の有する意義も、今後のシンポジウムのテーマにとって示唆的であったように考えられる。中川氏の提題にみられるように、従来あまり例のないアリストテレスとアウグスティヌスとの比較によって、前者の『命題論』第1章が逆に照射され、それを通してキリスト教的言語観とギリシア的それとの間に介在する本質的な相違と、前者の独自性がより闡明化されることになったといえる。そして加藤氏が、今後の問題としてギリシア教父の「ことば」に対する観点の検討が

不可欠であることを強調されたことも、銘記すべき点であろう。なお討論の経緯についてもふれるべきであろうが、それは以下の提題者の報告に十分反映されていると考えられるので、紙幅の関係もあり省略する。

提 題 オリゲネスとアウグスチヌスにおける声

加 藤 武

序

われわれはここで次のふたつのテキストを比較し、声とはなにかを問う。

- (1) オリゲネスの『ヨハネによる福音講解』VI, xvii, 94~102: xx, 108~111. (以下Jと略記)
- (2) アウグスチヌスの『説教』288, 3-5 (以下Sと略記)

アウグスチヌスがはたして、直接にオリゲネスのこのテキストを読んだかどうか、それをここで問うのではない。これまでいかにも、アウグスチヌスがプロチノス、ポルピュリオスと比較されることは多くあった。しかしフィロンからオリゲネスを経てアウグスチヌスに及ぶ思想的な系譜については、顧みられることが極めて乏しかった¹⁾。これでよいか。顧みる余地があるであろう。

1 オリゲネスの場合

オリゲネスはヨハネによる福音書1章23節の、「わたしは荒れ野で叫ぶ声である。主の道を真っ直にせよ、と」における声とはなにかについて述べている。

「神の子が厳密に言ってロゴスを用いられるホ・ロゴスにはかならないように……ヨハネもロゴスを明らかにするために、フォーネーを用いたのです」²⁾。(以下小高毅訳による。)

これはオリゲネスの声に関する基本的な見解を示す。この点で、ヘラクレオンと根本的に異なる。ヘラクレオンはロゴスとしての救い主と、その解釈者としてのヨハネとは、次元を全く異にする、と見る。ヘラクレオンは言う。